

堀 林 巧 著

『ハンガリーの体制転換

——その現場と歴史的背景——』

晃洋書房 1992年 vi+252ページ

羽 場 久 混 子

I

本書は、1988年から91年にかけてのハンガリーにおけるカーダール(Kádár János)体制の終焉から共産主義体制崩壊後の新しい政治・経済・社会状況の現場レポートを中心とする叙述からなっている。「1985~1991年の期間に通算9回」というハンガリー訪問により、多くの新進政治家・思想家・知人・友人たちへのインタビューや討論を基礎に構成されたものである。全体として臨場感があふれ、読みやすくよく調べられている。本書の最大のメリットは、何よりもその「転換期のハンガリーの現場レポート」という性格にあるといえよう。ただし、現場レポートという性格上、状況を知らないものにとってはそれぞれの政治家の思想や社会・経済政策の一貫性や背景がつかみにくいという難点があることも事実である。その意味で、最後にコンパクトながら、「体制転換の歴史的文脈——ハンガリー小史」として、ハンガリー史概説がまとめられたことは、読者にとっても親切であろう。

II

本書の構成は以下のとおりである。

序 文

第1部 ポスト共産主義時代の諸相(1990~1991年)

I 脱共産主義政権の誕生——1990年春

II ポスト共産主義時代の政治・経済・社会——1990年夏~1991年春

補論 1991年その後——若干の覚え書き

第2部 改革から体制転換へ(1988~1989年)

I カーダール時代の終焉と政治の流動化——

1988年

II 改革から政治体制転換へ——1989年

第3部 ハンガリー史と体制転換

I カーダール時代の意義と限界——1956~

1988年

II 体制転換の歴史的文脈——ハンガリー小史

上のように、本書は、第1部が1990年から、第2部が88年からの現場レポート、第3部はIが56年から、IIが建国(9世紀)以来の歴史概説、という形で、現代から時代がジグザグにさかのぼっていく形式をとっている。斬新で、同時代的共感を持って読めるものの、前提・背景となるものが後で出てくることから、若干の読みづらさはあった。

第1部のIでは、社会主義体制崩壊後、1991年春までの政治・経済・社会状況が描かれる。本書で一番力が割かれている部分である。ここでは、総選挙の結果、からくも民主フォーラムが勝利したものの、社会主義体制崩壊後のハンガリーの新政治状況においては、与党の「伝統・民族派」、野党の「西欧・自由主義派」および(旧支配党改革派や社会民主党などの)「社会主義的左派」という三極構造が存在し、それが互いに政策面でしのぎあっている事実が示される。

そうした拮抗した対立・緊張関係を象徴するように、第1部のIIでは、1990年秋の地方選挙でのリベラル派の巻き返し(自由民主連合35議、総選挙より8議増、青年民主連合18議、同5議増)や、同年秋のタクシー・ドライバーの橋上封鎖による実力行使の事件が紹介されている。

また経済面では、民主フォーラムなど保守派、民族派のブレーキにより、他の旧東欧の国(たとえばポーランドやチェコスロヴァキア)に比べ、国家資産の急速な民営化、外国資本導入には比較的警戒的で、たてまえとしては民族的・土着的民営化、民族資本の育成をめざす政策がとられている点が述べられている。

経済の方向としては、1988年に社会主義改革派がめざしていた「北欧型社会」ではなく、「南欧・地中海型経済構造」が90年9月の「3カ年計画」でうち出されている点が、いわゆるペンタゴナール(オーストリア、イタリア、ユーゴスラヴィア、ハンガリー、チェ

コスロヴァキア)の関係強化の時期ともつながっていて、興味深い。しかし、1992年現在では、実際にはこうした「南欧・地中海型経済構造」の試みは徐々に「ドイツ経済圏」「中欧経済圏」に置き換えられているのが事実ではないだろうか。

経済政策では今ひとつ、農地再私有化と「補償法」について触れられている。これは、小農業者党再建の際の最大のスローガンであるが、1990年および91年の2度の違憲判決を受けて政治的にも実質的にもその意義は後退してしまった。のみならず、ハンガリー財政の再建、新中間層の育成にもブレーキをかける結果となっている。

社会状況については、反ユダヤ主義、「百家争鳴」の歴史の見直しなど、興味深い事実が並んでいる。ハンガリー人におけるカトリック、人民主義のアイデンティティや、ユダヤ人への嫌悪などは、現代の分析だけでは理解しがたい部分であるが、この点も第3部で歴史的背景を押えられるようにしてあることは、評価できる。

第2部、「改革から体制転換へ」では、1988年にさかのぼり、カーダール失脚後の社会主義体制末期の改革の状況が、民主フォーラムなどの自主的政治団体の登場、経済の自由化、複数政党制の導入などに焦点をあてて描かれている。

第1、2部を通じて行なわれている、重要な思想家、政治家へのインタビューは珠玉である。第1部でのヴァイダ・ミハイ(Vajda Mihály)のハンガリー歴史認識や、第2部での社会主義改革派ヘゲデューシュ(Hegedűs András)のハンガリー知識人分析(ユダヤ人中心の都市派と、農村に基盤を持つ人民主義者との対立関係)、さらに自由民主連合マジャール・バーリント(Magyar Bálint)の政党分析などは、興味深く、価値あるものである。

歴史の見直しの問題については、1956年事件に象徴される過去の客観的事実の公開が、カーダールの殺人者としての告発と共産主義体制の全面的一掃につながっていくという経緯が描かれている。ここから著者は、体制転換の重要なモメントとして、1956年を中心とする「歴史の見直し」を位置づけているが、これは若干短絡的であろう。もちろんこうした内省的な歴史の見

直し作業は、体制の正統性を掘り崩すものとしてきわめて重要であるが、体制転換の決定的な触媒となったのは、やはり国際環境と社会主義ブロック全体の枠組自体の大転換、すなわちソ連の大幅な軍縮の結果、東欧が独自の行動をとってもソ連の軍事介入はほぼありえないという状況、アジアのNIEs諸国にすら負けるという社会主義経済の行き詰まりに対する民衆の社会主義への明確な忌避であったといえるのではないだろうか(注1)。そうした結果、歴史の見直しは、その後客観的見直しを越えて、1991年11月に成立した「共産主義者の政治犯罪の時効を無効とする法律」のように、共産主義者への報復主義となり、それが国民的共感を持って迎えられていくというように、過度に政治的になっていくことの問題点をも押えておく必要がある(この法律は、92年春、違憲判決が出され、現在執行停止中である)。

対外関係については、第1、2部とも、中立化をめざしながら漸進的な西への移行、の実態を説き、そしてそれが望ましいという著者の主張があるが、「西」へ移行したとき起こってくる新たな問題が提起されていないのは残念である。

全体として、第1、2部の現場レポートはよく調べられており、興味深い事実も多い。しかし、政治・経済・社会・文化状況をすべてフォローしつつ、それぞれの政策や状況を系統的・歴史的に描くことはきわめて困難であり、結局、ポスト共産主義とはどのような時代ととらえるのか、という点についての著者の視点が充分読み取れなかったことが残念である。小括のところで「西欧的近代化の軌道への再度の復帰」と位置づけるとあるが、現実には(また本文でも)むしろそれがいかに困難であるかという事実がうきぼりになっており、位置づけと内容にギャップが感じられた。「西欧への復帰」の問題点がどこにあるのかを明示してほしかった。

第2部で、その前提となる「どのような時代を作るか」をかかげた政治・思想潮流の影響力の変遷過程、すなわち、社会主義労働者党内の中道派から改革派へ、さらに新興諸党派への力関係の変転の経緯が(インタビューを通じて)集中的に現われているので、この部分をもう少し著者なりにまとめられたらよかったのだ

はないかと思う。

III

第3部、「ハンガリー史と体制転換」は、第1、2部の同時代レポートとは異なり、1956年以降のカーダール期の短い概括と建国以来のハンガリー史の素描とからなっている。

評者は個人的には、この第3部のII、ハンガリー小史が一番面白かった。ここで著者は、最初にオーキー(Robin Okey)の「西欧的近代化のキャッチ・アップ」過程としての『東欧近代史』と、ベレンド(Iván T. Berend)の「西欧的近代化」に失敗した地域の「別の道」の探求の軌跡の総括としての東欧近現代史(『ヨーロッパの危険地域』)を対比させつつ^(注2)、自らの見解はベレンドの見解に近いとして、基本的にハンガリー史を西欧の近代化への接近の努力の歴史として現在までを描いている。

この小史が面白いのは、西欧型近代化をめざそうとするハンガリーという著者の問題枠組が見えてきているからである。この切り口からふりかえると、著者の自由民主連合の評価、国家資産の民営化への関心と評価、社会の自由化・西欧化の評価という第1、2部の同時代分析が、著者の関心枠組を示す、著者の思想の通底として見えてくる。

ただし第3部における著者のオーキーとベレンドの対比には、若干疑問が残った。

評者の私見では、オーキーにおいてはむしろ、中心と周辺という世界システムの観点から、中世的な一元的世界が崩壊して以降、近代の東欧史は西欧への中心化により否応なく周辺および半周辺化していく過程としてとらえられており、そうした構造的枠組の中では西欧的近代化は実現し「えなかった」過程として描かれているのではないかと考えるため、オーキーとベレンドとの差はあまりなく、むしろ「ベレンドに近い」と述べている著者の方に西欧的近代化の志向が感じられるからである(本書最後の文、「ハンガリー(および旧共産主義国全体)のポスト共産主義が『西欧的軌道への回帰』に至ることが、当該国民にとっても世界にとってもより望ましいことであると私は考え

る」など)。

成功的西欧型近代化を志向しつつ、いかに努力してもそれを実現「できなかった」歴史がまさに問題となっているのであって、それは現在やはり一抹の不安として存在する課題でもあるはずであろう。

著者が引用している『ヨーロッパの危険地域』のベレンドが序論で述べているように、西欧化の成功の可能性はよくて半分、むしろ現在見られるように、「西欧化」の結果は、経済的従属化、それに伴う政治的・安全保障の後背地域あるいは二義的周辺地域としての旧東欧の取り込みを招いており、民族問題の激化の中で右翼および左翼急進主義の危険性、保守主義、権威主義、反ユダヤ主義の台頭など、近代化の「挫折」の可能性ははまだ決してなくなっていない。それはすでに、著者が第1、2部で描いているように、国民コンセンサスとしては民主フォーラムが勝利し、民族主義、反ユダヤ主義、報復主義等の潮流が国民の通底に存在するという事実、西欧派コスモポリタンはむしろ知識人少数派であるという事実にも現われているといえよう。ベレンドは、別のところで、(ハンガリーでの西欧化が)成功したとしても失敗したとしても、社会自由主義の潮流が主流を占めることはまれであること、成功した場合は、中道右派と左派の政権交替が繰り返され、失敗した場合は、右の極端主義の台頭の危険性がありえると述べている^(注3)。新たな、より危険な「体制転換」が起こりうる可能性はなくなっていないのである。

なお、ハンガリー語表記(人名)に、若干のミスがあった。

数カ所にわたって出てくる共産主義者ベラ・クーンは、ハンガリー語表記に従えばベーラ・クンであり、他の人名がすべてハンガリーの慣用にならって姓を前に出していることに従えばクン・ベーラ(Kun Béla)である。ベレント・イヴァンは、ベレンド・イヴァーンである。オルバンはオルバーン(Orbán Victor)、ラコーツィはラーコーツィ(Rákóczi Ferenc)、ゲレは日本では慣用かもしれないが、実際はゲレー(Gerő Ernő)である、その他。

いずれにせよ本書は、1988年から91年までのハンガリーを扱った政治・経済・社会の全体的事象をリアル

に同時代の現場レポートとして扱ったものとしては、最も詳細な興味深いものであることはまちがいないといえよう。

(注1) これについて評者はいわゆる東欧の「民主化」の内実に若干懐疑的であり、1990年に見るような制度としての民主主義の導入は、西欧的民主主義の創出というよりも「民衆主義」の表出により、保守・伝統への回帰、民族主義・反ユダヤ主義の台頭を招いた点を指摘している。羽場久泥子「1989年の『民主化』とは何だったのか」

(季刊『窓』 特集：東欧革命とは何だったのか 第8号 1991年夏)。

(注2) R・オーキー著 越村勲ほか訳『東欧近代史』勁草書房 1987年／イヴァン・T・ベレンド著 河合秀和訳『ヨーロッパの危険地域——東欧革命の背景をさぐる——』岩波書店 1990年。

(注3) ベレンド・T・イヴァーン著 渡辺昭子訳「ヨーロッパのほうへ——しかしどのようにして?——」(季刊『クオ』第3号 1992年春) 76~78ページ。

(法政大学社会学部助教授)